章南中学校　臨時保護者会での質疑の概要　　Ｈ２２.６.２２（火）19:00～22:20

参加者：保護者２２２名、学校評議員５名
静岡県教育委員会社会教育課長補佐１名・三ケ日青年の家所長１名
小学館集英社東海事務課長１名
市教委１４名（教育長ほか１３名、臨床心理士を含む）
教職員１７名（校長ほか１６名）

◇　保護者からの質疑

質疑の要旨	回　答　の　要　旨
現場にいた人に説明してほしい	（教諭）午前中のレクの中で途中雨が降り出してきた。前日までの打ち合わせで「カッター訓練は雨が降っていても決行する」としていたが、前日に雨が降りそうだということが天気予報でも出ていたので、所員としっかりと確認していた。当日も「以前打ち合わせしたとき（下見）に、雨でもやるということでしたが、どのような状況で判断をするのですか」と聞いた。「雨については、かなりの雨でもやれます。嵐であったり、波がたかかったりしたらできません」と所員の方が言った。前日の夜の打ち合わせでも同様の確認をした。 当日、所員の人から「雨については問題ないのでやる」と話を聞いてきたことを、学年で確認し、校長に伝えた。 （所長）当日 12 時過ぎに注意報を確認した。 所員は、「雨が降っているし、注意報も出ているので、通常よりも早く終了するプランでいきます」ということで了承した。注意報の出ている時に、私と校長で相談するという点ですが、当日、昼すぎに退所する小学校が 2 校あり、退所式に出席していたので、校長への報告を怠ってしまった。 当日、中学校の先生方に正確な情報が届いていなかったことになる。
注意報が出ている時も、以前に実施したことがあるのか	（所長）注意報は浜松南部という広域エリアで出される。三ケ日青年の家の周辺では、必ずしも風が強くならないこともあり、注意報が出ても出航したことはあった。
転覆艇に青年の家の所員がいなかったのはなぜか	（所長）青年の家では、２艇につき１艇は先生方２人で担当していただいている。今回の場合だと、４艇出廷しているので、２艇は所員が乗っているが、２艇は先生方のみで操船をお願いしている。ハーバーに残った２名のスタッフが概況のチェックとカッターの進路を見守り、風や波の変化を感じた時には、無線でその旨をキャプテンに知らせコース変更するようにしている。また、今

質疑の要旨	回　答　の　要　旨
	回のようなレスキューの要請があった場合、その２名がレスキュー艇に乗って救助に向かうという方式をとっている。 　青年の家では、カッター以外に様々なプログラムが同時並行で運営していて、学校のプログラムとしてもいろいろなご希望があるので、それに対応するためにも、所員をカッターだけにつぎこむことはしないでいた。県の運営当時からそういう形をとっており、私どももそれを引き継いでいる。
４艇にのっている生徒の名簿はもっていたのか	（主任）ボートに乗っている生徒の名簿は、各艇に乗っている教員がもっていた。
救助活動の様子がまったくわからない 転覆後、転覆艇に乗船していた先生たちは、どのような行動をとったのか。青年の家の人はどうしていたのか	（教諭）曳航されしばらくして、まずオールが飛んだ。その時、人間も飛ぶかもしれないと思ってしばらくした時には、転覆した。気づいたら水の中。自分は転覆したボートの中にいた。その中に何名かの生徒もいた。真っ暗ではなく、空気があった。ボートの中は叫びだす子もいてパニック状態。自分たちは救助されているのだから、空気を大事にしていれば救助はされると思って、子どもたちに「がんばろう」と声をかけた。波が入り込んで艇内の空気がだんだん少なくなってきて、死ぬかもしれないと思った。そこで子どもたちに大きく息を吸って「出るよ」と声をかけて出た。その時、すべての子が出たかどうかわからなかった。自分ももがいて出て、周りを見ると、ボートにつかまっている子が数人いた。それを見ているうちに、自分はボートから流されて離れていった。ボートの上で捕まって叫んでいる子もいた。自分のところに、さきほど救助にきたボートがきて、流されている自分にロープを投げてくれた。そして、安否のわからない子がいると伝えた。救助艇は転覆したボートのところに進み、所長が船から湖面に飛び込んで、子どものところに行った。もう一人の運転していた所員が、「このボートは定員いっぱいですので、一旦引き返します」と言った。救助艇は湖面に浮いていた子とともに私も拾い上げてくれたので、生徒とともに三ケ日青年の家に行き、陸に上がった。 （教諭）私は、後ろの方で舵を取っていた。転覆した時、自分は外に投げ出された。その時、投げ出された生徒２名が見えたので「オールを持って浮かんでいよう」と言った。波が高く、沈みそうになったが、そのうち転覆船が近づいてきたので、「転覆船のヘリ

質疑の要旨	回　答　の　要　旨
	を持とう」と３人でつかまっていた。波が高くボートが目の前にあるので反対側の状況はわからなかった。しばらくヘリを持っていると、右の方から一人の女子が近づいてきて一緒につかまっていた。しばらくして、曳航してくれたボートがきて、ロープを投げるからつかまれと指示された。見える範囲の子にしか声をかけられなかった。ロープが渡され順番に船に上がった。自分があがったときには、すでに何人かの子がいて、その子たちがどこから出てきて救助されたのか確認できなかった。湖面に浮かんでいた子が救助されて、最後にもう一人の先生が救助されて、人数を確認すると８人の子どもがいた。あと１０名どこにいるのか、子どもに尋ねるとだれだれがいないといったが、私も混乱していて自分がどういう状況でここまで来たのか説明できる状況ではなかった。転覆船の上に何名か乗っている姿は確認できた。 （所長）私は救助ボートを操船していたが、できるだけ早くみんなをあげなくてはと思った。近づいてロープを投げてつかまらせてもう一人の所員と船に上げた。その中に２人の先生もいた。先生方は、特に海の救助のトレーニングを受けているわけでもないので、船の中から声をかけて子どもたちを外に出していただいたのは、すばらしい判断だったと思う。それ以上のことを求めるのは、二次災害につながると思われる。私は２０年間ダイビングのインストラクターをしていたので、船の人数がいっぱいになり、さらに１０名の子どもを乗せると船自体がまた転覆する可能性があると思い、まず助けた子を帰そうと考えた。子どもたちがまだ中にいると言ったので、船の中にもぐった。３名の頭が見えた。すでに空気も少なくなっていた。水を飲んでしまうような繰り返しの中で、一人ずつ一緒に出て、その子を船にあげ、息を整え、３回ボートの中に入った。３回目は、２回目のあとなかなか息がもどらなかったが、一人の子の頭が見えていたので、３回目は行くことができた。その時点で船の上は９名。西野さんがいないという声が聞こえたが、確認できなかった。その状況の中で、もう一度船の中を確認しにいくことができなかった。 　その後、消防のレスキュー隊のゴムボートが来てくれた。そのゴムボートに４名の子どもが乗り岸に戻った。その後、レスキュー隊に残りの５人の子どもたちも収容され岸に戻った。子どもた

質疑の要旨	回　答　の　要　旨
	ちを陸にあげた後、船がどうしても気になり、レスキュー隊にボートをもう一度確認してほしいと言った。 　先生方２名を乗せた船が戻らなかったのは、すでに消防や警察のレスキュー艇が出ているので、我々が頭を突っ込むと二重事故などを起こしてはいけないという判断で、レスキュー活動は警察と消防に任せることとした。それで、青年の家のモーターボートは２回目の出航はとりやめた。
当日、保護者は、この雨ではカッターはやっていないと思っていた。頭のどこかに不安とかなかったのか。だれかやめようと言う人はいなかったのか	.（校長）出発する時に、湾内を見ていて、中央コースではなく、今回のコースにしたから大丈夫だと思った。 （教諭）出発前、所員から「これぐらいならがんばろう」と言われ、さらに、途中で波が高くなったら引き返すと言われ、やれると思った。 （教諭）打合せの時、「波も穏やか、雨はひどくともやります」ということで、所員のことばを信じていた。不安はあった。 （教諭）朝の集いの時、レクリエーションの前、波を見ていて、それほどひどくないと思った。レクリエーション終了の頃、所員に「本当に大丈夫か」と確認した時、「半日たっても波がそんなに変化しなかったので大丈夫」と聞いて、納得した。 （教諭）カッター訓練はやらせたいと思っていた。私は所員のところに確認に行ったので、「大丈夫です」ということばで安心してしまった。
校長は学校に定期的に連絡したのか	（校長）生徒が今どこにいるか、救急車が入ってきたりする中で、現地にいて定時連絡ができていなかった。事態の把握が進まないまま、警察や消防が来て、さまざまな情報があり、正確な情報を流すために、対応が遅れた。
こういう事態を想定して、連絡員の先生を置くことは考えなかったのか	（教諭）養護教諭が連絡員をしていた。
連絡員として、養護教諭は何をしていたのか。どのような状況だったのか	（養護）私は、体調の悪い子どもたちが寒がったので、ロビーで待機していた。３時くらいに４名体調が悪いという連絡があり、ロビーで到着を待っていた。他のところ（グリーンプラザ浜名湖）に到着するとは思っていなかった。 　校長と事務所の人から転覆という状況を知った。誰がいつ帰っ

質疑の要旨	回　答　の　要　旨
	てくるかわからない状況で、人員確認をしながら、声をかけていた。子どもたちはばらばら帰ってきたので、対応に精一杯だった。 ※（所長）消防と警察に救助要請を出したので、その後の人数確認自体は、消防と警察にお任せすることになったと思う。消防と警察は、事故地点から近い海岸のホテルを本部とし、情報の一元化を行っていたようだ。私も岸にあがったときには、警察がホテルで名簿によるチェックをしていた。警察も全部で約100名近くの子どもがいるので、その確認には非常に混乱した様子だった。そうした状況で情報を一元化し確認するという体制が取れなかったと思う。
現地から学校に第1報の連絡があったのは何時だったのか	（教頭）午後3時半すぎである。校長より、「ボートが転覆した。今救助に向かっている。教頭先生はそばを離れないでいてほしい」という連絡が入った。また、4時すぎ、校長と連絡がとれた。「救助艇で8人の生徒と教諭2人が帰ってきた。あとはわからない。安否を気遣っている」それが第2報だった。

豊橋市立中学校　三ケ日青年の家　利用状況

施設名	所在地
三ケ日青年の家	静岡県三ケ日町 （現浜松市）

年　度	参加校数	学　校　名						
平成12年度	0							
平成13年度	0							
平成14年度	3	吉田方中	前芝中	二川中				
平成15年度	3	吉田方中	前芝中	二川中				
平成16年度	4	吉田方中	本郷中	前芝中	二川中			
平成17年度	6	豊城中	東陵中	吉田方中	北部中	前芝中	二川中	
平成18年度	5	中部中	東陵中	吉田方中	前芝中	二川中		
平成19年度	6	豊城中	東陵中	羽田中	吉田方中	前芝中	二川中	
平成20年度	7	中部中	豊城中	東陵中	羽田中	前芝中	二川中	高豊中
平成21年度	5	豊城中	東陵中	羽田中	前芝中	章南中		
平成22年度	6	章南中	~~豊城中~~	~~東陵中~~	~~羽田中~~	~~前芝中1~~	~~前芝中2~~	

豊橋市立章南中学校　自然体験活動利用施設

年　度	施設名
平成13年度	豊橋市野外教育センター
平成14年度	高遠少年自然の家
平成15年度	高遠少年自然の家
平成16年度	高遠少年自然の家
平成17年度	山びこの丘
平成18年度	山びこの丘
平成19年度	山びこの丘
平成20年度	山びこの丘
平成21年度	三ケ日青年の家
平成22年度	三ケ日青年の家